

実践のまとめ（第3学年 国語科）

上越市立大和小学校 教諭 上原 希

1 研究テーマ

**言葉の使い方や組み合わせ方を考え、豊かに表現する児童の育成
～協働的な学習を取り入れた詩を書く活動を通して～**

2 研究テーマについて

(1) テーマ設定の意図

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、中央教育審議会（2016）は、「主体的な学び」に関して、「子供自身が目的や必要性を意識して取り組める学習となるよう、学習の見通しを立てたり振り返ったりする学習場面を計画的に設けること」と、「学ぶ意欲が高まるような学習課題の設定」について示している。「対話的な学び」に関しては、「互いの知見や考えを広げたり、深めたり、高めたりする言語活動」を設けること、「深い学び」に関しては、「特に、思考を深めたり活性化させたりしていくための語彙を豊かにすること」の重要性を示している。

語彙に関して、学習指導要領（平成29年3月告示）には、「語彙は、全ての教科等における資質・能力の育成や学習の基盤となる言語能力の重要な要素」であり、「語句の数を増やすだけでなく、話や文章の中で使いこなせる語句を増やすとともに、語句の意味や使い方に対する認識を深め、語彙の質を高めること」と示されており、量と質の両面から語彙を豊かにする指導の改善・充実を図ることが求められている。

これらの視点から、これまでの授業を振り返ると、次の2点が課題である。1点目は、課題設定が不明確なことがあり、目的意識が曖昧となり、児童が主体的に書く姿につながっていないということである。2点目は、言葉の使い方や組み合わせ方を十分に習得させていないことである。そのため、児童は使い慣れた言葉を選択しがちであったり、表現が固定化されてしまったりしている。以上の2点から、本研修では「言葉の使い方や組み合わせ方を考え、豊かに表現する（学習した技法や効果を活用し、詩の創作を楽しむこと）児童の育成」をテーマとし、協働的な学習を通じて、想像したことを詩に表現する活動を行う。

(2) 研究テーマに迫るために

① 目的意識をもち、主体的に取り組むことができる言語活動の充実

「なりきり詩」をつくり、学級で「にじいろ（学年の愛称）アンソロジー」を発行する活動を設定する。その際、詩の題名（なりきったものが分かる箇所）を空欄にして、最後のページに答えを載せ、クイズの要素を入れて楽しむことができるようにする。

また、詩の表現の楽しさを感じ、なりきるヒントを得ることができるよう、『のはらうた』（工藤直子 童話社 1984～）を活用する。何になりきった詩なのか、表現に着目して考える活動を通して、「自分も何かになりきって、詩をつくりたい」という意欲を高め、主体的に取り組めるようにする。

最後に、自分の詩をクイズ形式にして、他学年の児童や家族などに紹介する場を設ける。相手の反応を見たり、感想をもらったりすることで、伝えたいことが言葉を介して相手に伝わる喜びを味わったり、読み手がよいと感じる表現を知ったりしてほしい。

② 表現技法の獲得と活用

白石（2015）が、「詩の学習で最も大切にしなければならないことは、“技法”と“効果”を活用した作品の読みの方法を習得することである。（中略）創作活動においてもこの“技法”と“効果”は活用されなければならない。」と述べ、「好きなことを自由に創作させるのではなく、目的を明確にした創作活動」の重要性を指摘しているように、詩を創作する際は、何となく言葉を並べたり、感覚的につくったりするのではなく、学習の中で獲得した技法や効果を活用して創作できるようにする。

そこで、言葉の特徴や技法、使い方、作品の中にあるきまり等を丁寧に学習する。その際、『のはらうた』から、児童に獲得させたい表現技法が使われているものを数篇選び、どのような効果があるか学習し、「なりきったものを楽しい言葉で表現したい」「なりきったものを当ててほしいけれど、すぐには分からない文を考えたい」など、意欲を高め、創作の際に活用できるようにする。

③ よりよい表現にするための交流活動の設定

学級全体で1つの題材を取り上げて、表現の仕方を考える時間を設ける。様々な言葉や表現技法に触れる中で、言葉の使い方を学んだり、表現のおもしろさを味わったりし、自分の詩の創作へつながるようにする。

また、詩をつくる際、題材の特徴や様子をイメージマップに表す活動において、タブレットを活用し、友達と交流する。交流を通して、自分の言葉と友達の言葉を観点ごとに整理し、詩をつくる際の言葉の選択肢を増やす。

さらに、詩を推敲する際に、グループで交流する時間を設ける。よさやアドバイスを伝え合い、もう一度自分の詩の言葉を吟味して詩を完成させる。

(3) 研究テーマに関わる評価

- ① なりきったものを進んで詩に表現しようとした児童が80%以上になる。（観察、自己評価）
- ② 友達との交流を通して、言葉を選び、よりよい（様子が伝わる・工夫した）表現を考えることができた児童が80%以上になる。（観察、詩、自己評価）

3 単元と指導計画

(1) 単元名

ほかのものになりきって（みんなと学ぶ 小学校国語 三年下 学校図書）

(2) 単元の目標

- ・様子や行動、気持ちや性格を表す語句の量を増やし、詩の中で使うことができる。
〔知識・技能〕（1）オ
- ・目的を意識して、経験したことや想像したことなどから書くことを選び、伝えたいことを明確にすることができる。
〔思考力・判断力・表現力等〕B（1）ア
- ・感想や意見を伝え合い、自分の詩のよいところを見付けることができる。
〔思考力・判断力・表現力等〕B（1）オ
- ・想像したことを、よりよい表現になるように工夫して、詩に表そうとする。
〔主体的に学習に取り組む態度〕

(3) 単元の評価規準

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
評価規準	・題材の様子等を表す語句の量を増やし、詩の中で使っている。 〔(1)オ〕	・目的を意識して書くことを選んだり、伝えたいことを明確にしたりしている。〔B(1)ア〕 ・感想や意見を伝え合い、自分の詩のよいところを見付けている。〔B(1)オ〕	・想像したことを、よりよい表現になるように工夫して、詩に表そうとしている。

(4) 単元の指導計画と評価計画（全7時間、本時6／7時間）

次 (時数)	学習内容	学習活動	主な評価規準と方法
1 (1)	・教科書の詩の題名を考えたり、音読したりする。 ・「のはらうた」から、なりきる楽しさを味わったり、表現方法を学んだりする。（表現技法のネーミング）	◎詩の題名を考えましょう。ヒントとなった言葉は何ですか。 ◎次の詩は、何を表したものでしょう。おもしろいと思った言葉、その言葉を使うよさは何ですか。	思・判・表 詩の言葉に着目し、題名を考えている。【発言・ワークシート】 知・技 言葉が表現している様子や働きに気付いている。【発言・ワークシート】
	・全員で同じものになりきり、技法を使わない詩と技法を使った詩をつくり、比較する。	◎「○○」になりきって、感じることを自由に挙げましょう。 ◎2つの詩の違いを考えましょう。	主体的 感じたことを進んで言葉にしようとしている。【発言・ワークシート】 知・技 表現技法の働きに気付いている。【発言・ワークシート】
2 (3)	・なりきるものを決めて想像し、Jamboardを活用して言葉マップをつくる。	◎形や色、そのものから見えるものや聞こえる音、気持ちなどを想像して、言葉にしましょう。	思・判・表 なりきったものを想像し、様々な観点から言葉で表現している。【Jamboard】
	・友達と交流して、自分がなりきるものについての言葉を増やす。	◎友達がなりきるものから想像することを書き足しましょう。 ◎言葉を仲間分けして、整理しましょう。	思・判・表 友達のなりきったものを想像し、想像したことを言葉で表現している。また、観点ごとに言葉を整理している。【Jamboard】
	・詩に表したい内容を考え、言葉を選んだり、順序を考えて並び替えたりしながら詩を書く。	◎なりきったものの様子や伝えたいことを考えましょう。言葉を選んだり、順序を考えたりして、詩を書きましょう。学習した“技”を1つ以上使いましょう。	主体的 ものになりきって詩に表そうとしている。【ワークシート】 知・技 語句の量を増やし、詩の中で使っている。【ワークシート】 思・判・表 比較・分類しながら、言葉を選んでいく。【Jamboard・ワークシート】
(6) 本時	・詩をグループの友達と読み合い、推敲する。	◎詩を読み合い、よいところやアドバイスを伝え合いましょう。 ◎友達のアドバイスや自分で気付いたことをもとに、よりよい詩になるように考えましょう。	思・判・表 友達の詩について、よさやアドバイスを伝え合っている。【発言・ワークシート】 主体的 より気に入った表現になるように、学習したことを生かして詩を書こうとしている。【ワークシート】
3 (1)	・詩をクイズ形式にして読み合い、なりきったものを想像したり、よい表現などを伝え合ったりする。	◎詩のクイズ大会をします。何になりきっているか考えたり、よいところを見付けたりしましょう。	思・判・表 詩の感想や意見を伝え合い、自分や友達の詩のよいところを見付けている。【発言・ワークシート】

4 単元と児童

(1) 単元について

本単元は、何かになりきり、その「もの」から見える世界や気持ちを想像して、何になりきったかが伝わるように表現を工夫して詩をつくるという内容である。説明文のような表現

ではなく、伝えたいことを短く凝縮させた表現になるように、言葉を吟味し、推敲する過程を大切に、言葉に対する感性を豊かにしていきたい。

人間以外のものになりきることで、作品全体が擬人化されたものとなり、擬音語、擬態語、比喩表現など、様々な表現で詩をつくることができる。言葉集めや推敲の際には、友達との交流活動を設定し、言葉の選択肢を増やす。様々な言葉や表現に触れ、伝えたいことにぴったりの言葉を選んでいくことで、語彙の質を高めていく。

また、完成した詩の表現に着目することで、言葉のおもしろさを味わい、自分や友達の詩のよさを感じられるようにする。

(2) 児童の実態 (男子17名、女子17名、計34名)

学習に意欲的に取り組み、最後までやり遂げようとする児童が多いが、学習に集中できず、なかなか課題に取り組めない児童や個別支援が必要な児童もみられる。

児童は、これまでに自分が経験したことを書いたり、本やインターネットで調べたことを説明文に書いたりする活動などを行ってきた。書く内容が明確であったり、どのように書けばよいか型が決まっていたりすると、見通しをもち、分かりやすい文章を書くことができる児童が多い。しかし、本単元のように想像して書く活動では、何をどのように表現したらよいかを迷う児童がいるため、手立てを講じたり、支援したりする必要がある。

5 本時の展開 (令和4年11月22日実施)

(1) ねらい

自分や友達の詩のよさや、よりよくなりそうなところを見付け、感想や意見を伝え合う活動を通して、学んだことを生かした表現になるように、詩を推敲することができる。

(2) 展開の構想

本時では、前時までに書いた詩を友達と読み合い、推敲する。まず、友達の詩のよいと感じた言葉、もっとよくなりそうな言葉などを伝え合い、自分ならこのような言葉を使うというアドバイスをする。

次に、友達のアドバイスを参考に、もう一度自分の詩の言葉を吟味しながら推敲し、詩を完成させる。ここでは、言葉を選ぶ観点を明示し、友達のアドバイスを全て取り入れるのではなく、自分が伝えたいことや表現したいことにふさわしい言葉は、どれなのかをしっかりと考えるように助言する。

最後に、本時の学習を振り返る。言葉を変えた理由、変えなかった理由を考えることで、自分の言葉へのこだわりを実感できるようにする。また、同じものでも感じ方や表現の仕方が様々であることを感じたり、友達との交流を通して、自分の文章がよりよくなったと感じたりできるようにする。

(3) 展開

時間(分)	学習活動	◎教師の働き掛け ・予想される児童の反応	□評価 ○支援 ◇留意点
7	○本時の目標の確認	T: 前回、どの言葉を使ったらよいか、どのように表現したらよいか迷っている人がいました。友達とアドバイスをし合って、自分の詩をもっとすてきなものに変身させましょう。	◇詩の題を当てるクイズの要素を入れ、楽しく活動できるようにする。
詩のよさやアドバイスを伝え合って、もっとすてきな詩に変身させよう。			

	○交流の仕方の確認	T:この詩の題名は、何でしょうか。 C:分かった、スイカだ！ T:様子がよく分かった言葉や分かりにくかった言葉、こうした方がいいと感じた言葉は、ありますか。 C:「緑と黒のしましまドレス」という言葉から、スイカだと思いました。 C:「形は丸いです」って、そのままだから、「体は、ボールみたいに真ん丸さ」はどうか？	◇様子がよく分かる言葉や、分かりにくい言葉などを入れた詩を例示し、交流の際の着目点を明確にする。 ◇言葉を選ぶ観点を明示する。 ◇2色の付箋紙に友達の詩のよさとアドバイスを書き分ける。 ◇付箋紙に書いたことは、話して伝えるようにする。
2 0	○詩を読み合い、よさやアドバイスを伝え合う。	T:グループで詩を読み合い、よさやアドバイスを伝え合しましょう。 C:「アイパッドが入ると、重たいんだよね」というところから、ランドセルの気持ちがよく分かったよ。 C:「ずっしり」って入れると、もっと重い感じが出ていいと思うよ。	◇3、4人で交流する。 ○よさやアドバイスが見付からない児童に助言を行う。 思・判・表 友達の詩のよさやよりよくなるころなどを見付け、感想や意見を伝え合っている。(交流の様子・付箋紙)
1 3	○詩を推敲する。	T:友達のアドバイスや自分が気付いたことをもとに、詩をもっとすてきに変身させましょう。 C:消しゴムで字を消すところは、友達が言っていた「文字や線をばくばく食べる」に変えよう。 C:友達の言葉もいけれど、やっぱりこの言葉がぴったりだから変えない。	○安易に変えるのではなく、自分が表現したいことにぴったりの言葉を考えたり、選んだりするよう助言する。 主体的 より気に入った表現になるように、学習したことを生かして詩を書こうとしている。(観察・ワークシート)
5	○振り返り	T:振り返りの仕方を確認する。 C:友達の言葉と迷ったけれど、この言葉の方が、様子が伝わったから変えませんでした。 C:友達が教えてくれた「双子」は、さくらんぼにぴったりだから変えました。	◇言葉を変えた理由、変えなかった理由など、自分の言葉へのこだわりを実感できるような振り返りにする。

(4) 評価

- ・友達の詩のよさや、よりよくなりそうなところを伝え合い、詩を推敲している。
(思・判・表) 【観察・付箋紙・ワークシート】
- ・学習したことを生かして、より気に入った表現になるように詩を書こうとしている。
(主体的) 【観察・ワークシート】

6 実践を振り返って

(1) 授業の実際【第1次・第2次について】

① 詩のおもしろさを味わい、表現技法を獲得する

第1次では、『のはらうた』の数篇を読み、何になりきった詩であるかを考えた。その際、ヒントとなった言葉や、言葉のリズムや響きなどがおもしろいと思う言葉に着目した。そして、その言葉の特徴や詩における効果を考え、みんなで表現技法に名前を付けた。(図1、図2) 答えを当てたい思いから、児童は自然と詩の言葉一つ一つに着目し、その言葉の意味を考えたり、様子を想像したりしていた。短い言葉で巧みに表現された詩のおもしろさにひたることで、自分もつくってみたいという思いにつながった。

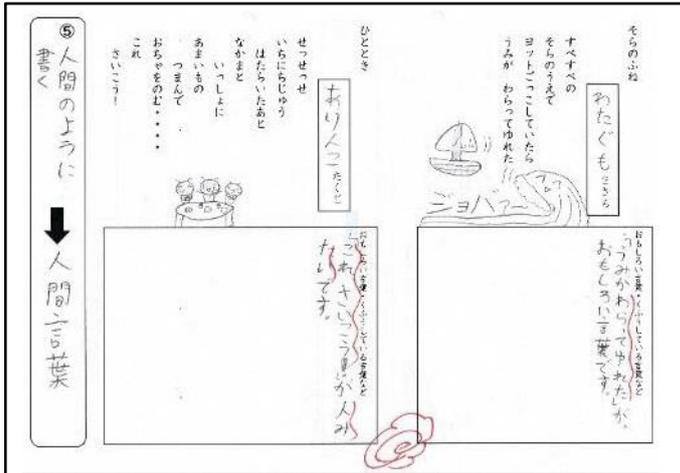


図1 表現技法を学習し、名前を考えたワークシート

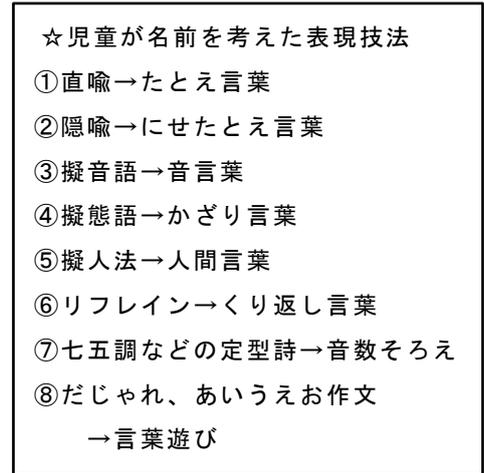


図2

また、8つの表現技法を学習後、「りんご」になりきって、学級全体で2つの詩をつくった。1つ目は、「そのまま言葉」で技法を使わずに形、色、触感などを書き表したものである。(図3右) 2つ目は、「技(変身言葉)」(表現技法を技と呼んでいたが、学習過程で“変身言葉”の方が児童に馴染んでいく様子が見られたため、同時に示すことにした)を使って1つ目の詩を推敲したものである。(図3左) この2つの詩を比べると、「そのまま言葉の詩」は、「答えがすぐに分かってしまう。」「ただの説明になっている。」「技(変身言葉)を使った詩」は、「想像が膨らむ。」「様子がよく伝わる。」「例えると楽しい。」「声に出して読みたくなる。」「答えが分かりそうで、すぐには分からないところが楽しい。」という気付きが挙げられた。

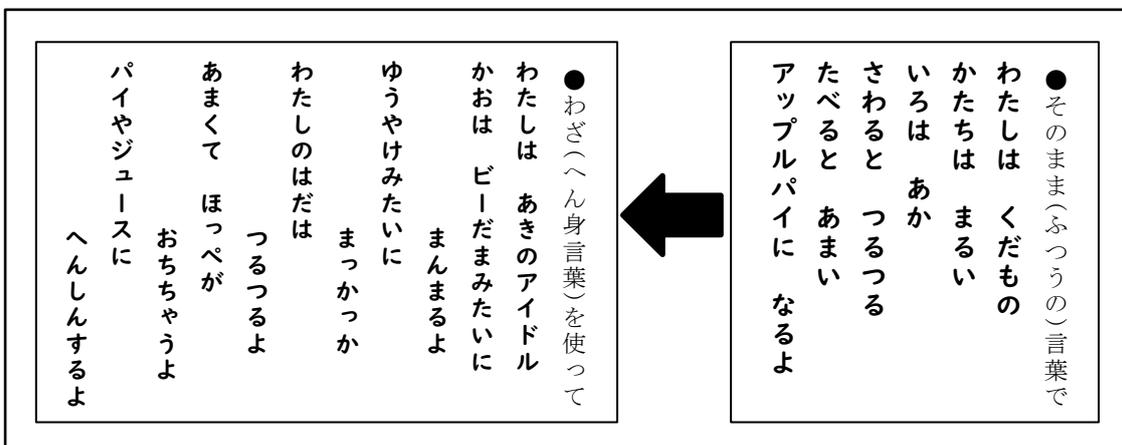


図3 学級全体でつくった「りんご」になりきった詩

「“くだもの”と言わずに、りんごを表現できる言葉はないかな。」という発問に、児童は頭を抱えていたが、「食べ物だとそのままだし。」「秋の果物……。」「秋が旬とか。」「うーん、秋の……。」「秋のアイドルがいいと思います。」「おお、いいね。」「すてき。」と、考えを出し合う中で、ぴったりの言葉に出会う喜びや達成感を味わう姿が見られた。全員で同じものになりきって1つの詩をつくることで、表現技法の使い方を学んだり、友達が考えた言葉のおもしろさを実感したりすることができた。

② 言葉マップをつくり、なりきり詩をつくる

第2次1、2時間目（3/7、4/7）は、まず、諸感覚を使って、なりきったものから見えるもの、聞こえる音、気持ちなどを想像して言葉にし、Jamboardの付箋に書き溜めた。次に、3、4人でグループをつくり、友達のなりきったものから想像した言葉を付け加えた。そして、自分が集めた言葉と友達から教えてもらった言葉を観点ごとに整理して「言葉マップ」とした。この言葉集めの際、諸感覚のイラストカード（図4）や集めた言葉を観点ごとに整理したもの（図5）を提示したが、なかなか多くの言葉を引き出すことができなかった。「形」「色」「大きさ」「音」「触った感じ」など、児童のシートにも言葉集めの観点を具体的に示しておくとうよかったと考える。しかし、友達との交流を通して語彙を増やし、言葉マップを完成させて（図6）詩の創作につながることも見られた。



図4 諸感覚のカード

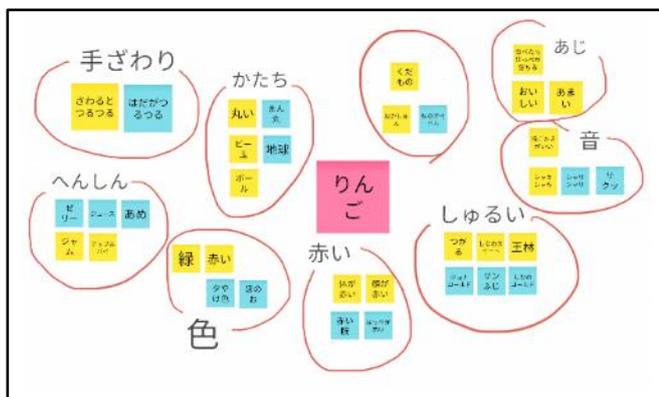


図5 観点ごとに整理した言葉マップの例

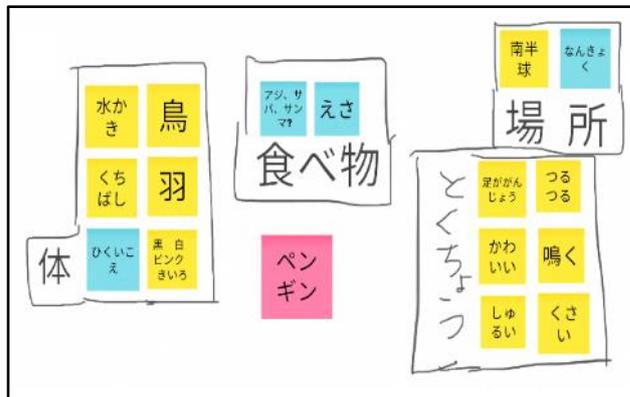


図6 児童の作成した言葉マップ

第2次3時間目（5/7）は、言葉マップを基に、学習した「技（変身言葉）」を1つ以上使って、詩を創作した。多くの児童が、教室に掲示してある既習の『のはらうた』数篇と表現技法などを参考にして、自分の想像や思いをすらすら書き表すことができた。自力で創作することが難しい児童には、以下のように対話を通して言葉を引き出した。

A児：何を書いたらいいかわからない。
 T：へびのどんな様子を伝えたいかな。
 A児：うーん。
 T：へびになったAさんは、何をしているの？何か食べているの？散歩？寝ているの？
 A児：散歩かな。
 T：散歩は、どんな風に歩いているの？
 A児：によろによる。
 T：どうして散歩しているの？
 A児：おなかのすいたから。えさを探しに行った。

そして、表現技法や言葉の並べ方の選択肢を示し、児童が選びながら詩をつくった。（図7）

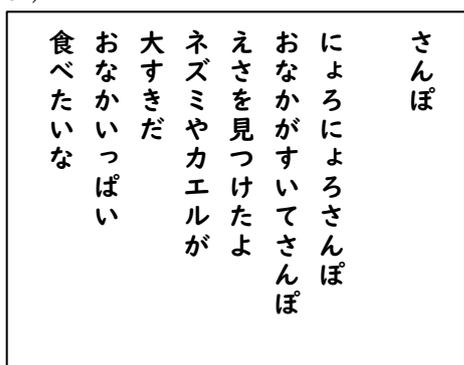


図7 A児が作成した詩

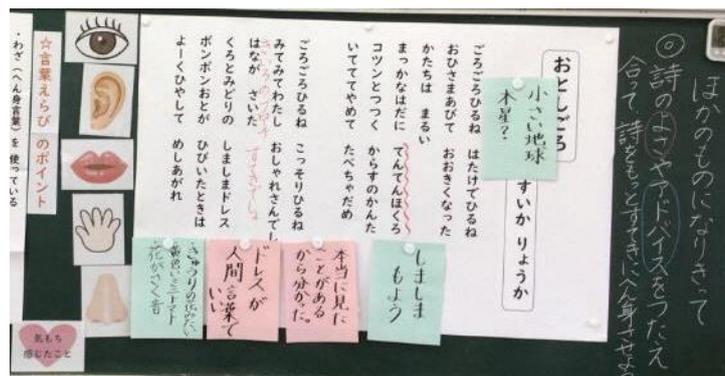


図8 本時の板書（交流の仕方の提示）

③ 友達との交流を通して詩を推敲する（図8）

第2次4時間目（本時6/7）

では、詩をグループの友達（言葉集めと同じグループ）と読み合い、よさやアドバイスを伝え合って、推敲した。まず、教師が創作した詩（図9）を提示し、児童は、何になりきったかを考えたり、よいと感じた表現やアドバイスを伝えたりした。「ドレスが人間言葉でいい」など、よさを伝えるときはピンク色の付箋に、

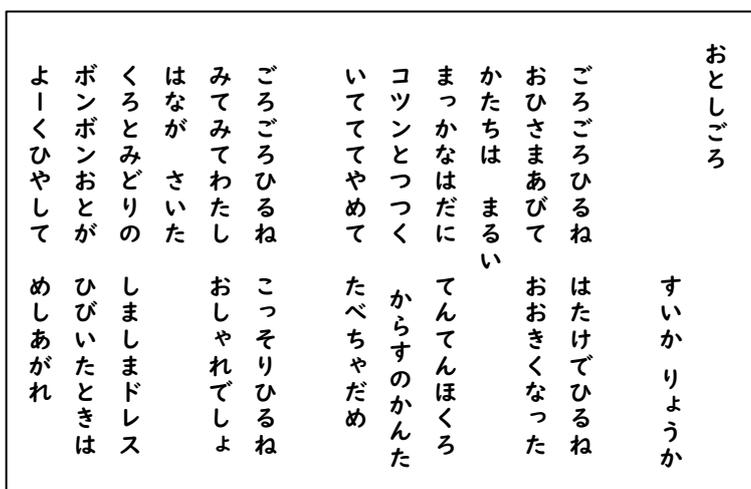


図9 本時で例示した詩

「かたちはまるい」は、小さな地球にするといい」などのアドバイ

スは、水色の付箋に書くよう、板書で示した。「かたちはまるい」「はながさいた」は、児童に着目させ、表現の仕方を考えさせたかった部分であったが、「はながさいた」は意見が出ず、「はながさいた」は、そのままだからどうしたらいいか悩んでいるのだけれど……」と投げ掛けた。学習した表現技法をどれも取り入れようとしたため、情報量が多く、児童が考えにくくなってしまったようである。一連だけにしたり、表現技法を絞ったりするなど、シンプルな詩の方が導入で扱う教材として有効であった。

その後のよさやアドバイスを伝え合う交流では、「飾り言葉や人間言葉で犬のことを表現していいと思いました。」「人気者っていう言葉がいいね。」「形のことも書くといいと思うよ。」「皮をむくところで、ペリペリとか音言葉をつけるといいと思う。」など、言葉に着目したメッセージを送る姿が見られた。一方で、「全部いいと思う。」「直すところは、ありません。」といったメッセージもあった。表現技法とその効果を活用して読むことや、具体的によさを伝えることについて、学習を積み重ねていく必要があると感じた。

最後に、アドバイスを生かして推敲した。友達の考えを全て取り入れるのではなく、自分でぴったりの言葉を考えたり、選んだりするようにポイントを示した。(図10) 児童は、友達の言葉を自分なりにアレンジして取り入れたり、自分で考えた言葉が好きだから変えないと決めたり、よく考えて自分の詩をすてきなものにしようと取り組んでいた。

B児は、友達から「“オオカマキリのえさになるぞ”と付けた方がいいと思う。」というアドバイスをもらい、自分なりの言葉で書き加えた。また、「色を表す言葉を入れたいと思って、付け加えた。」と振り返りに書かれているように、緑色の体

について書き直している。また、初めの詩では1連、2連ともに「跳ねる」と表現していたが、推敲する中で1連は「跳ねる」と表現し、2連では「跳んでいる」と表現することにした。微妙なニュアンスではあるが、あえて「跳んでいる」に変えたことや、繰り返して書いているところにB児のこだわりを感じる。(図11)

- ・ ☆言葉えらびのポイント
 - ・ わざ(へん身言葉)を使っている
 - ・ リズム感がある
 - ・ なりきったものを想ぞうできる
 - ・ (様子が分かる)言葉
 - ↓ 分からないようで分かる
 - ・ 自分が想ぞうした様子や伝えたい
 - ・ 様子にぴったりな言葉
 - ・ だれにでもつたわる言葉

図 10

ぼくは夏の虫
バッタびよんきち

ぼくの体はみどりいろ
山のようにみどりいろ
びよんびよんはねる
まいにちはねる

ぼくはオオカマキリのえもの
まいにちまいにち
とんでいる
ふたりでいっしょに
とんでいる

←

ぼくは夏の虫
バッタびよんきち

いつもみどりのふかふかベッド
まいにちびよんびよんはねるんだ

ぼくは夏の虫
体はつるつるしているよ
まいにちこどもをおんぶして
びよんびよんびよんびよんはねる

図 11 B児の初めの詩と推敲後の詩

振り返りでは、「友達のアドバイスがよかったし、音言葉を付けたかったから(言葉を変えた)。「言葉を変えた方がリズム感がよかったから。」「変えようと思っていたけれど、友達がいいと言ってくれたから変えなかった。」と、言葉と向き合う児童の姿が見られた。しかし、「アドバイスがあまりなかったから変えなかった。」という児童も数名いた。そのような児童には、よさについて書かれた付箋に着目させ、自信をもって取り組めるよう声を掛けたり、自分でさらに工夫できる点を考えるようアドバイスしたりした。

(2) 研究テーマに関わって

① 目的意識をもち、主体的に取り組むことができる言語活動の充実

クイズの要素を入れて「にじいろアンソロジー」を発行するというゴールを設定することで、児童は相手意識や目的意識をもち、直接的に表現するのではなく、他のものに例えたり、読む人が楽しめるような言葉で書こうとしたりしながら意欲的に取り組んでいた。また、「分からない」と悩んでいた児童も、自分の作品を作りたいという思いをもち、あきらめずに完成まで粘り強く取り組む姿が見られた。

『のはらうた』の活用によって、様々な表現技法の効果を学び、何かになりきって言葉で表現するおもしろさを感じることができた。そして、「自分も詩をつくりたい」という意欲を高め、詩の創作につながった。

② 表現技法の獲得と活用

児童に獲得させたい（効果を感じ取ってほしい）表現技法を8つほど取り上げ、『のはらうた』からそれらが使われている詩を選び、鑑賞した。学習した表現技法にみんなで考えた名前を付けたことで、児童自身の技として活用しやすくなったように感じる。取り上げた表現技法が多く、選ぶ際に迷ったり、使われない表現技法があったりしたため、もっと絞ってもよかったとも思うが、様々な表現技法を学習したことで選択肢が増え、自分が使えそうなものを選ぶ姿も見られた。多くの表現技法を知り、「技（変身言葉）を1つ以上入れて詩をつくる」という条件があったことで、感覚的に詩を創作するだけでなく、自分が表現したい様子や内容に適した表現技法を活用することができた。

③ よりよい表現にするための交流活動の設定

学級全体で1つの題材について詩をつくったり、友達と言葉集めをしたりすることで、自分が思い付かないような言葉や表現に出会い、その使い方を学ぶことができた。量と質の両面から語彙が豊かになっていったと感じる。

また、詩を推敲する際に行ったグループでの交流は、付箋でよさやアドバイスをもらうことで喜びを感じ、詩を創作した達成感を味わったり、推敲への意欲を高めたりすることができた。友達の言葉から新たな気付きが得られ、言葉を変えて、より自分が気に入る詩が完成して満足そうな姿も見られた。

◇研究テーマの評価について

- | |
|---|
| ① なりきったものを進んで詩に表現しようとした児童が80%以上になる。
(観察、自己評価)
⇒28人/30人 (80%以上を達成) |
|---|

ほぼ全ての児童が、なりきるものを決め、伝えたい内容や様子を考えながら、表現技法を選んで詩の創作に取り組むことができた。『のはらうた』を活用して、詩のおもしろさを十分味わったことが、「自分もつくりたい。」「どんな言葉でつくろうか。」と、主体的に取り組む姿につながったと考える。また、「これじゃ、答えがすぐに分かってしまうから、もっと違う言葉がいいな。」と、言葉を吟味する姿が見られたことから、クイズの要素を入れたことは、言葉にこだわって表現するための手立ての1つとなったと考える。

なりきるものを決められない児童や、何を書いたらよいか分からない児童は、教師や友達との対話を通して、自分で決める、選ぶことで詩を完成させることができた。

- | |
|--|
| ② 友達との交流を通して、言葉を選び、よりよい（様子が伝わる・工夫した）表現を考えることができた児童が80%以上になる。
(観察、詩、自己評価)
⇒28人/30人 (80%以上を達成) |
|--|

児童は、言葉集めや推敲の際に友達から様々な言葉を得たことで、自分になりきったもの（題材）に対して、言葉を使って新たな見方をすることができた。「自分は、この言葉が好きだから変えなかった。」「友達が言うように、確かにふもふしているから（変えた）。」など、自分が好きな表現、友達がよいと感じる表現を知ることで、多様

な考えや言葉の使い方を学んだ。自分がより気に入る言葉を探し、何度も言葉を変えながら、納得するまで推敲する児童もいた。ただ、今回の実践では、「なぜ、その言葉が好きなのか。」ということ問うことができなかつたので、児童の言葉へのこだわりを掘り下げて自覚させることも必要であったと考える。

交流後、「変えたくないから。」という理由で詩を推敲することなく完成とした児童がいた。友達が書いたアドバイスの意味（「なりきったもの」の視点ではなく、自分から見た「なりきったもの」について書いている部分に対してアドバイスがあった）を伝えると納得して、なりきったものの視点で書き直した。

(3) 今後の課題

① 表現技法の獲得と活用

3年生の段階では、表現技法にオリジナルの名前を付けることで、取り組みやすくなったが、国語科で学習する用語として、今後の学習過程で正しい名称を押さえる必要がある。また、表現技法は、覚えるだけでは活用できるようにならない。詩に限らず、文学教材や作文等、様々な領域や単元において、表現技法を意識して読んだり、書いたりする経験を積み重ねていきたい。

② より効果的な交流を目指して

本時の交流場面において、よさとアドバイス（友達の課題）を同時に見付けることが、短時間では難しい様子が見られた。初めに「技（変身言葉）を使うともっとよくなりそうなところ」を出し合い、推敲後によさを見付けて伝え合うなど、複雑な活動とならないようにする等の改善策が考えられる。また、よく書けていて、アドバイスすることが見付からないという様子も見られた。その結果、「友達からのアドバイスがなかったから、変えなかった。」と、自分の詩の推敲につながらない児童もいた。友達からアドバイスをもらいたいことを自分で考えて示したり、自分が考えた言葉をピックアップして、他の表現を考えてもらったりするなどの方法が考えられる。児童の学びが深まるような交流活動となるよう、授業展開や手立てを考え、実践していきたい。

【引用・参考文献】

- ・中央教育審議会.『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策について（答申）』.文部科学省.2016
- ・白石範孝.『白石流国語授業シリーズ3詩の授業』.東洋館出版社.2015
- ・工藤直子(詩)保手浜孝(画).『版画のはらうたⅠ.Ⅱ.Ⅲ.Ⅳ.Ⅴ』.童話屋.1992.1996.2003.2008.2013